Gunp!! （お試し）

まーながるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｕｎｐ！！　（お試し）

【Ｎコード】
Ｎ９０４５Ｒ

【作者名】
まーながるむ

【あらすじ】
１２年前の２月２９日。
そこからすべては始まった。
選ばれた若者たちに突如として発生した超能力と彼らの間で始まった戦い。
ある者は自らの能力を力として存分に振るい、ある者は能力を隠し平和に生きようとする
学力は平均だが豊富な設備が揃ったマンモス校、私立城南高校の二年生である纏（まとい）　空（そら）もそんな平和を求める１人だった。

しかし彼の思惑から外れ彼と、彼の友人たちは能力者達の戦いの渦中へと巻き込まれていく。
現代異能力バトルファンタジー、ここに始まる！！
とか真面目にあらすじっぽいものを書いてみる。
落選作品（お

（前書き）

えー、舞台はおなじみ（？）城南高校です。
シューティング☆スターの主人公の転生前の学校とその他掌編の舞台ってだけで他のを読む必要もないです（
というかぶっちゃけこの作品自体がシューティング☆スターの基になったようなものです。
この話の主人公側の登場人物すべての能力がシュー（ｒｙ　の主人公の物になってる感じで（

続きもそのうち書いていく予定ですが、反響によってはすぐにでも書き始めます！（

「なんでこんなことになっちゃったんだろう」

バレンタインデーだからチョコを渡そうと思って。でも直接は恥ずかしくて渡せないから誰もいなくなってから机に置こうと思って。そしたら急にすごい音がして、電気が消えて……。

外を見てみれば、

「ここどこ？　……私たちの高校でしょ？」

眼下の校庭では色鮮やかな爆発が絶え間なく続き、向かいの旧校舎の窓は端から割れていく。つい数分前には私が今いる教室の窓ガラス数枚が同じ惨状になった。飛んできたのは小指の先程度の小石が十数粒。運よく私に被害はなかったけど、天井や壁に弾痕を残しているところを見ると人を殺すには十分な威力を持っていたらしい。

いつの間に私の高校は魔窟になったのだろう。

窓の外の数人が私から見える位置に立っているけど、その全てが同じ服装をしている。私と同じ、城南高校の制服だ。爆発を起こしているのも小石を銃弾のように飛ばしているのも私と同じ学校の生徒。

怖いのに目が離せない。バカげた考えではあるのは分かっているけど目を閉じた瞬間に自分が撃ち抜かれるんじゃないかという考えが頭を埋め尽くしている。

怖がりながらもホラー映画を見てしまう状況に似たものがあるのかも。

そして、目を逸らしていれば良かったと思う出来事が起きた。

窓ガラスが割れ続けることや連続する爆発と比べれば些細なこと。しかし、私にとっては一番大事なもの。
なんてことはない校庭の隅に立っていた平凡なオブジェ、鉄パイプなどを組み合わせただけの、見ようによってはロボットにもエイリアンにも、はたまた校長先生にも見えないことはない飾り物。去年、私たちのクラスが遊び半分で作った代物だ。
少し前のアメリカのどこかの州知事が扮する殺人ロボットが未来から送られてくる、そんな内容の映画と同じタイトルを付けられた奇怪な人型がバラバラに分解された。
卒業したらプレス機で潰そうぜ、なんて冗談半分で話していたものだけど壊れてしまったのは悲しい。あれは私と彼が初めて話すきっかけになってくれた物だったから尚更だ。

「なのになんで、」

その彼が、校庭にいるんだろう。どうして、壊させたんだろう。
音は全く聞こえないけど、彼が破壊を指示したのは何となくわかる。校庭にいるメンバーの中の3人は見覚えがある。彼と、彼の幼馴染で私のクラスメイト、そしてその妹。
良く見えなかったけど彼がその幼馴染の妹に話しかけた後、その子がバラバラにしたように見えた。もちろん釘どころか溶接されている箇所もあるオブジェを生身で分解するなんてことはばかげているけど、少なくとも私にはそう見えた。

「なんでよぉ……」

季節は冬。
具体的な日付を言うならば二月十五日。バレンタインデーの翌日特有のブルジョワと貧民の温度差が激しい教室で俺は一人悩んでいた。

「はぁ……分からん」
「なーにがわっからんのですか、クー君？　ため息ついてるとお昼ご飯も美味しくないよ？」

俺がつい漏らした独り言に反応したクラスメイトが無邪気に声をかけてきた。ついでに名前が纏空（まとしそら）だからクウでクー君。

「あー真希奈か……いや、なんでもねぇよ」

一瞬、心当たりがあるか聞いてみようかとも思ったけどやめておく。女生徒が関わっているから恋がどうのこうので面倒なことになるのは目に見えているし。

「む、甘酸っぱい香りがする！　高科ー、山野辺ー、集合！」
「あ、どちらにせよ面倒なことになるのか」
「なんだぁ？ってまたクーさん絡みかよ」
「まぁ貴史、いつものことだろう。新川なんだから」

呼ばれた二人の男子も既に展開は読めている。

「うぅ……いつものことってなにさー！　私はクー君の元気がないから盛り上げよーって思っただけなのにー！」
「……俺に元気があっても絡んでくるからやっぱり普段通りだけどな」

「クー君にまで冷たくされたー！」

俺に絡んできたのは新川真希奈（にいかわ まきな）、高科貴史（たかしな たかし）、山野辺学（やまのべ まなぶ）の三人だ。

真希奈はその三バカトリオの自称キャプテンであり、最もテンションが高い。

数学と物理だけ異様にできるスポーツバカだ。

ちなみに他の教科のテストではいつも合格ラインの一点下で赤点を取る一種の天才。

「どーせ私は理系教科の一部と運動しかできないよーだ！」

「いや、スポーツバカはプレイ中でもバカってことだ」

運動神経は抜群だけどルールを知らないからなー……バレーボールをしていた時もオーバーヘッドキックでスパイクを決めていた。それセパタクローだろ。ん、マイナーか？　まぁ手以外の身体の部位、主に足を使ってプレイするバレーボールみたいな球技だ。俺も詳しくは知らん。

「取り柄も否定された！　……あれ？　ていうか私、誰にショーカイされてんのかな？」

「真希奈の未来の旦那様ってことで」

「クー君、そんな大胆なこと言われると私も恥ずかし、」

次いで貴史、ゴリラ、濃縮還元バカ。

「あーん、クー君のいけずー！」

「それより濃縮還元バカって意味わかんねぇよ！」

「……んー、ギュってして戻したら肝心な部分だけなくなってた、みたいなのかな？」

「真希奈の例えも理解出来ないけど……まぁ意味分からないところ

が貴史っぽいね」

学と真希奈は何故か納得してしまった。正直適当に言ってみただけなんだが……悪いな、貴史。こいつらの発想力を侮っていた。今日からお前は濃縮還元バカだ。

貴史の名誉のために言いなおすと貴史は三バカトリオ唯一の完全なバカだ。真希奈みたいに一部教科だけ得意なんて言うことも無い。

「……ぅわぁあああああああん！！」

ゴツい体格している割にいじられキャラ。人呼んで歩くバカの標本。

最後にバカ二人のボケを捌ききる秀才メガネの学。頼れるみんなのお兄さん。

眠れる獅子と静かなる竜の血を引く伝説の男、なんて微妙な二つ名があったりする。

「それ誰か呼ぶの？」

「いや、主にバカ二人が広めた」

だから知ってる人は多いぞ。呼ぶ生徒はさすがにいないだろうけど。

「へぇ……」

そして対バカストッパーでもあり、文武両道。付け加えるならちょっといじめッ子気質。

「ひ、広めたのは私じゃなくて主に高……！」

ゴチン！

「イタっ」

「ま、まて、新川きたねぇぞ！あれはおま、」

ボコボキドゴボカッ

「ま、真希奈より数が多いぞ……しかも考えたのはクーさへベッ！？」

「ふぅー、危ない危ない」

俺まで殺られるところだったから追加で一発殴っておく。

まったく、俺を売ろうとするなんて。

「さて高科貴史、あのアホみたいな二つ名を考えたのは誰だ？」

正直に言えばこれ以上痛い目を見ないで済むぞ？

「クーさ、」

ぱきょっ

「くはっ！……オレでじだ、ずびばぜんでじだ」

「よろしい」

泣きつつも必死に左手の小指の向きを懸命に戻そうとしながら話す貴史の言葉にうなずく。

（（（（鬼！））））

む、クラスメイト全員が思ったことが伝わってきた気がする。鬼だなんて失礼な。

「まぁ確かに様子がおかしいね、いつもより貴史に対して優しい。あれかな、幼馴染が休んでるからかな？」

まったくだ。それとあいつは関係ない。

（（（（（いや、小指折って優しいっておかしいよ！））））

また何か聞こえたぞ？　普段なら……って貴史のためにわざわざ説明するのももったいないな。

まぁ言えることがあるとすれば貴史はギャグキャラだから大丈夫。

「でしょでしょ、だっしょー！？いつもだったらとりあえず私に『ハロー、マイハニー、（キラリン）今日も君のピーはピーでバキューンだね（キラーン）』って言ってくれるのに！」

誰だよ、そのウザいキャラ。しかもそのキャラに引っ張られて真希奈自身もうざくなってるから自重してくれ。

そもそも挨拶の時点で伏字三つも使ってくる奴なんて即行で警察か病院に連れて行くべきだ。

そんなこと言われたがってる真希奈も一緒にな。

「まぁオレとクーさんの力関係も新川がいつもどおりブッ飛んでんのも分かった。ただ結局どうして俺が呼ばれたのかが分からん」

なんだとゴリラー！　と復活した貴史と真希奈がじゃれているのを横目に学が続ける。

「話は僕が聞くから二人はそのままじゃれてていいよ」
「……とめてやれよ」

今さら誤魔化すのも難しそうだ。むしろここで誤魔化して後でバレたときのことを考えると話しといた方が良い気がする。

「んー、あー……詩端由岐(うたはゆき)って知ってるか？　つかまぁクラスメイトだけどさ」
「「「……は！？」」」

学のみならず、じゃれていた二人までもが過剰に反応した。

「な、なんだよ」
「なんだよって、クー君から私と立花(たちばな)姉妹以外の女の子の名前が出るとは思わなくて……」
「いや、そんな変なことじゃな、」
「あるな。少なくともオレは今学期、クーさんがその三人以外の女子の名前を呼んだのを聞いたことが……あー八津川(やつかわ)がいたけどアイツは中身が女じゃないからカウントしない」

えー、人の言ったことをいちいち覚えているとか……正直、貴史キモいぞ。あと俺は薫(かおる)の名前も何度か呼んでるはずだ。いや、あいつも女って言っていいのかは本人に聞かないと分からないけど。

「まぁ必要上、呼んだことはあっただろうけどね」
「クー君がクラスでは蒼羽(あおは)ちゃんと私以外と話さないから二人でクー君の嫁とかからかわれたのにー！　満更でもなかったけど！！」

はいはい。

「むぅ……クー君はやっぱり手強い……こうなったら、クー君！」
「今度は何だ？」
というか真希奈さっきから少しうるさいぞ？
「クー君、私ね、クー君見てると頭がぼーっとして、胸もドキドキして……」
「……」
胸の前で手をぎゅっと握って潤んだ瞳で俺を見てくる真希奈。
一応クラスの中では美少女として通っている真希奈のその素振りは、街でやれば男を何人かひっかけられることだろう。正直可愛い。
ただ、
「……真希奈、それは更年期障害だ、病院連れて行ってやろうか？」
「ちっがーう！」
こっちのバカな真希奈の方がからかいやすくて好ましい。
……というか何もなかったバレンタインデーの翌日にそれやるってどうなのよ。
「だって蒼羽ちゃんがいたから……休み時間は妹ちゃんも登場するし」
「でもなんで？　クー、あんまり詩端さんと関わりなかったでしょ？」
「お前らがさも当然のように俺の交友関係を知っている理由はおいといて……後ろを見ろ」
な？　一人すっごい険しい顔で俺を睨んでる女の子がいるだろ？

「「「！？」」」
「次はなんだよ！？」
「クーさんが他人の感情を気にするなんて……」
「いや、普通あんな表情されたら気になるだろ……単純に敵意ってわけでもなさそうだし」
「それでもクー君は普段ならしかとするって私なら断言できるっ」
「右に同じく」
「同上」
「お前らなんなんだよ……」

確かに普段ならその通りなんだけど、なんか怖いぞコイツら！
あんな涙まじりの視線に混乱と疑念が混ざったような感情を載せられたら気にするのは人間として当たり前だろ。

「いやいや、クーさんとしてはおかしぶげらっ」

貴史、人間の行動に文句つけるとはいい度胸してるじゃないか。
いつからお前はそこまで偉くなった、え？

「ヒィ！」
「まぁ詩端さんといえば、去年、学年制作で嬉しいイベントがあったよね」

あー、まぁ嬉しかったかどうかは別として一悶着あったなぁ。

「てかなんで学がそれを知ってるんだよ……まぁ、それであんな目で見られる理由が分からないから、」
「彼女の情報を教えろ、もしくは調べろと」
「ま、そんなとこ」

相変わらず学は理解が早くて助かる。他と違って話すのが楽だ。
ただ別に調べてまで情報欲しいわけじゃないからな？一応。

「それにしても由岐ちゃんかぁ」
「詩端由岐ってあれだろ？　すっごい優しいから下手な男より女子にモテるっていう」
「貴史の言い方はアレだけど確かに女生徒からも人気があるね」

ほー、まったく知らなかった。
そんな俺の顔を見た学が、

「……ふむ、じゃあ調べるのは好みのタイプとスリーサイズ、あとクーに対する評価辺りでいいのかな」

なんて言ってきた。いや、お前それじゃ、

「あぁ、あと趣味とか住所も知ってた方がいいんじゃねぇの？」
「貴史にしてはまともな意見だ。それで報酬だけど……」
「って違う！　なんで俺が恋してるみたいな前提なんだよ！？」
「あ、由岐ちゃんのスリーサイズなら上から八十四・五十六・七十六じゃなかったかな？　学期始めの身体測定の時の結果だけど」

というか同級生の頼みに報酬とか発生しないから！　あ、真希奈には後でコニーズのジャンボパフェＥＸプラスを奢ってやろう。しかし胸は大きいのに下半身はほっそりしてるのか。覚えておこう。

「まぁスリーサイズと住所は恋にしてはストーカーチックだけどね」
「つっこむのはそこか！？　しかもスリーサイズ教えておいて！」
「恋する乙女を誤解されちゃかなわんです」

やっぱパフェはキャンセルだ。ここまで言われたら流石の俺も沸点ギリギリだぞ。

「なんだ、クーさん詩端に惚れプルァ！」

「違ぇよ！……とにかく俺が知りたいのは、」

詩端がなんであんなに俺に向けて敵意向けて来てるのかってことだよ！　って言おうとしたら盛り上がっていた俺達の後ろの机が叩かれた。

「好みのタイプは一生懸命な人かな？　趣味は可愛いもの集めたりすること、例えばケティちゃんとか。んー住所は纏君の家の割と近くかなー。評価に関しては今は内緒。　あとマキちゃん、なに勝手に人の秘密の数字教えてるのかなぁ？」

「「「「……」」」」

「……バストもちょっと成長したもん。うん、一センチくらい……って、なんで自分で暴露しちゃってるのかな！」

なんかいた。てか本人いた。というかスリーサイズの辺りは聞かれてたっぽい。表面にこやかだけど青筋たってる。でも顔がちょっと紅いのは高評価だ。

しかしバスト八十五か……冬服だから分かりにくいけど夏が楽しみだ。

てか中途半端なノリ突っ込みって可愛いのね。

（……学、コイツ、いつからいたんだ？）

（ごめん、僕も全然気付かなかった）

他の二人もアホ面晒しているから気付かなかったんだろう。

学は格闘技関係をやっているからか気配を読めるらしいし、俺も

真似事程度ならできる。バカ二人に至っては野生動物並みの勘の持ち主だ。まぁ、全員アホみたいに盛り上がってたから意味ないけどな。

「とりあえず纏君、ちょっと廊下まで付き合ってくれないかな？」
「これは……一日遅れのバレンタイン？」
「な、なんでそういうこと言うの！？」

おー、顔真っ赤。もしかして脈あり？
でも呼び出された要件は違う者のような気がする。

「あぁソラでいいよ」
「そっか、じゃあソラ君。昨日の放課後何してたか教えてくれる？だいたい七時頃」
「お？　……別に、蒼羽たちと遊んでたな」
「ふーん、そっか」
「そーそー、なにが聞きたかったか知らないけど、」

何気なく詩端の顔を見ると予想以上に真剣な顔をしていた。

「なんで、壊しちゃったの？　って聞こうと思ったけど夢だったみたい。　朝見たらもう直ってたもん。　考えてみれば日本の高校の校庭で爆発とか銃弾みたいな小石が飛んでくるわけないよね。なんであんな夢見ちゃったのかなぁ」

一瞬、泣き出しそうな顔をした詩端は、すぐに笑顔に戻って話し始めた。それでも何処か怯えている気がする。怯えているのは俺にか、それとも現実にか。

「さぁ、な。疲れてんじゃねぇのか？　ストレス溜まってるときは

アクション映画的な夢見るらしいぞ」
「そっか……そうなのかなぁ？　あ、ちょっと待っててね！」
そう納得したような声を出して、心配事が無くなったような様子で教室に小走りで戻った。詩端は正直者らしい。すぐに顔に出る。
それにしても島戸原の奴ら、人払いに手ぇ抜きやがったな。もし死人が出てたらどう責任をとるつもりなんだ。今度あそこの誰かに会ったら取り敢えず一発殴ろう。
「ごめんね！　待たせちゃった……えっと一日お遅れだけど、これ、受け取って下さい」
うつむきながら差し出された両手にはこげ茶色のラッピングが施された箱。やっぱり一日遅れのバレンタインで間違っていなかったらしい。
「昨日は立花さんがいたから恥ずかしくて渡せなくて……そう言えば今日はなんで休んでるんですか？」
「蒼羽？　あいつならただの風邪。詩端さんが気にするようなことじゃないよ」
「そっか、じゃあ、立花さんによろしくね」
「……？　おぉ」
「五時間目は体育だから遅れちゃだめだよ」
やはり無理に作ったような笑顔を残して詩端は教室の中に入って行った。よろしくって何のことだろう。
でも、昨日の戦い見られてたのか……
「まずいよなぁ……説明しても信じられるようなことじゃないし」

国内企業の中でも特に大きい島戸原グループ。その重化学工業部門が秘密裏に主催している名も無き戦争。
その高校の校庭で爆発を起こす程度に滅茶苦茶な戦いを説明するには、まずそれ以上に荒唐無稽な十二年前から続く異変のことを知ってもらわなければならない。
その異変は二月二十九日という四年に一度しか来ない日付が大きく関係している。その日になると三十歳以下ということ以外は性別も人種も全く共通性のない百人程度の人間にあることが起きる。

『生命変革（バイオレボリューション）』

ごく一部のみが知っている、人間の異常な速度での進化。
その内容は、いわゆる超能力がある日突然使えるようになるというものだ。透視や発火、念動力などのある意味では親しみのあるものから、それ以上に異常な能力まで。その種類は十人十色と言っていい。しかし発現した世代によって能力には偏りがある。
例えば、二十人程しか発現しなかったといわれる第一世代の能力は既存の物を別の物へと変質させる。かくいう俺も第一世代であり、その能力は手で触れた金属を変形させる、というものだ。
八年前の第二世代は一つの概念を特化させた能力。読心（リーディング）や催眠術を得意とする一般的な超能力者も大抵はこの世代だ。
そして残る四年前の第三世代が現象の操作。俺個人の感想ではこの世代の人間が一番常軌を逸している。自らにかかる重力を減らしたり、巨大な斥力を発生させたりと人間業じゃない。そんなだから第三世代の能力を神の御業と偽る新興宗教もあったりする。
そして、その異変は今まで一度も公にされたことが無い。噂ではメディアなどに尻尾を掴まれそうになった能力者は何者かによって消されるらしい。
そして昨日の戦いはその能力者が集まって形成されたグループ同士の戦い。

これは島戸原重工が何らかの目的によって始めたサバイバルマッチ。最後まで生き残った一組には島戸原重工が可能な限りでその願いを叶えるという特典がある。無論、それが無かったとしても血気盛んな若者達は自分の能力で人を傷つけるという欲望から同じ状況にはなっていただろう。

新たに目覚めた異常な力で一般人を傷つけてしまえばただの暴力だが、同じような能力を持つものを相手取って戦うのならばそれは殴り合いの延長線上。そんな免罪符（いいわけ）が彼らの中にはある。

小学生の時に能力が発現した俺はそういった欲望とは無縁でユリ〇ラーなんて言いながらスプーン曲げを自慢していたガキンチョだった。そもそも人を傷つけるという行為自体になにも興味を持っていなかった気がする。そんなわけで俺はサバイバルに参加していない。

昨日の戦いは自衛のために仕方なくだ。

「しかし、なんで壊したの、と来たか」

昨日の様子を見ていたんだとしたら詩端が聞いてきたのはあの奇怪なオブジェのことだろう。自分たちで作っておきながら奇怪というのもどうかと思うが。

とはいえ、あのオブジェが俺達のクラスにとって大事なものだということには変わりない。それでも壊したのは……いや、壊させたのはそれ以上に大切なものを守るためとしか言いようがない。詩端のことだから説明すれば分かってくれるとは思うけど、それなら仕方ないと納得してくれるかは分からない。

何より理由を説明しようとすればやはり関わらなくていいものに関わることになる。

キーンコーンカーンコーン。

割と長い時間考え込んでいたらしい。始業を告げるチャイムが鳴

ってしまった。
そういえば真希奈に邪魔されてせっかくの手作り愛妹弁当も途中までしか食べてなかった気がする。
もったいなさを感じつつも教室に入ると、

「あれ、誰もいねぇ……」

仕方ないので弁当の残りを片付ける。あぁ、美味い。本当に俺の妹だったらよかったのに。食べてる間に詩端が体育だと言っていたことを思い出す。うん、まぁ弁当より優先するものでもないな。食後のデザートもあることだし。
しばらくは一人の時間を堪能するか。

「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末さまでしたー」

と思っていたのに横から声がした。
うん。日本人としては常識なんだけどお粗末さまという返しは料理を作った本人が謙遜の気持ちを込めて口にする言葉だ。それ以外の人が言うと作った人の料理が粗末だったっていう大変失礼な意味になってしまう。
つまり何が言いたいのかと言えば、

「紅羽(くれは)……なんでいるんだ？」

弁当を作った張本人、幼馴染の妹が体操服姿で隣の席に座っていたということだ。太陽の光を反射する金髪が大変目に眩しい。これだけ綺麗で地毛っていうんだから大したものだ。隔世遺伝ってやつか？

「うん、ほら、私も体育だったんだけど昨日の今日だったから見学してて。そしたらソラ兄のクラスも見えたから、ソラ兄いるかなーって。それで見つからなかったから探しにきちゃった」
「きちゃったって……授業に戻りなさい」
「えー、見学なんだよ？」
「見て学ぶ。それも大事なことだ」
「いやー、見学もせずに堂々とサボってる人に言われたくないかなぁ」
「ん？　俺も窓から見学してるぞ」

当然嘘だけど、俺の教室は校庭に面しているから良いわけ程度にはなるだろ。

「ふーん、二年生の男子はバスケットボールやってたよ。校庭使ってるのは二年生の女子」
「なんだって」

言われて外を見てみれば確かに女子生徒達がマラソンをしている。お、詩端（悩みのタネ）発見。トップを爆走してるのは真希奈だろうな。

「……おにいちゃんのえっち」
「これも保健体育……じゃなくて誤解だ」

前回まで男子がマラソンだったはずなのに……公明の罠だな。
そんなあほなことを考えていると左肩に重みが加わった。時々こあくまな金髪マイシスターが抱きついているからだ。

「んー、だからさー。ここで私とゆーっくり過ごそ？」
「暑いから離れなさい」

「しっぽりでもいいよ？」
「自分で言いながら顔を赤くしない。というか熱でもあんのか？」

アプローチがいつもより積極的だ。
最近になってようやく育ち始めた慎ましやかな胸を押し付け、細いのに健康的な両腕を俺の左腕に絡ませる。ちょっと洒落にならんので離れなさい。

「ぶーぶー」
「むしろブーイングより褒めてほしい」

いろいろ反応させることなくいつも通りな対応が出来た俺はすごいと思う。小さいからこその美点っていうのもあると思う。紅羽にはこのままでいてほしい。

「でもソラ兄なーんか悩んでる？」
「おー。見ただけで気付かれるとは、もしかして深刻なのかもしれないな」
「そんな可愛い妹分なんて……」
「誰も言ってない。バカ言ってると耳掃除すんぞコノヤロウ」
「いや、それむしろご褒美だよ？　膝枕でのご奉仕を要求すんぞバカヤロウ……まぁ、白状すると高科先輩が心配なら見てくればって言ってたんだけどねー」

貴史め……あとでＯ・ＳＨＩ・Ｏ・ＫＩだな。うん、しかも悩んでるクーさんに紅羽ちゃん届けちゃう俺グッジョブ！　とか思ってそうな辺りがムカつく。

「とか言っちゃって、私が来て嬉しかったくせに―」
「そこじゃなくて貴史如きが紅羽に話しかけたのが気に入らない…

…しかも俺に気を使うなんて」
「うわー独占欲だ。流石の私も照れちゃうかな」

もちろん独占欲だ。まだ紅羽に男は早い。あわよくば俺の物になればいいと思ってる。少なくとも貴史はダメだ。学ならお兄ちゃん考えないこともないです。

「考えたけど却下、っていうオチだよね」
「ご名答。紅羽はずっと俺の妹ってことで」
「それはやだなー……それで何悩んでたの？」
「やですか。ん？　あぁ、昨日の、クラスメイトに見られてたらしい」
「あー、それで詩端さん」

なんで紅羽が詩端のことだって分かったんだろう。真実はいつも一つ！　犯人は貴史！　ってことなんだろうけどさ。あいつ口軽すぎ。

「んー実は高科先輩がクーさんが詩端のこと好きらしいって話してたの聞いて、見学なんかしてる場合じゃない！　って飛んできたんだけどね」
「アイツ、こりねぇよな」
「反応してほしいのはそこじゃないー」

何度も同じようなことしては俺とか学に殴られてるのにまだ覚えねぇのか。というか紅羽と話してると本当に話が進まないな。ここは無理矢理にでも進めるか。昨日の話は紅羽にも関係がある。

「む、無理矢理なんて私困っちゃうな……しかも学校でなんて。でもソラ兄なら私……」

「反応してほしいのはそこじゃねぇ……てか余計な茶々いれんな。。意外と真面目な話なんだから」
「ん……ゴメン。ふざけすぎちゃった」

紅羽とのじゃれあいを遮ってでも真面目にならなければいけない理由はある。
第一には俺達の身の安全を確保するため。
能力の秘密が守られているのは誰も口にしないからというのも当然だが、秘密を守るために動いている者たちがいるからというのが大きい。

『執行人（エクスキューター）』

能力を持つ者、もしくはその関係者の間でまことしやかに語られているお伽噺だ。その話の内容は当然、怖くて赤いスプラッターホラー。実話ではなくお伽噺と言われる所以は誰も実物を見たことが無いから。見ることが出来るのは殺される瞬間だけ、というありがちなオマケ話もある。しかし、執行人（エクスキューター）を恐れて秘密が守られているというのは彼ら実在すると信じているものが多い証拠だろう。
何を隠そう俺も彼らの存在を信じる能力者の一人だ。つまり、昨日の俺達が見られたということが彼らに知られたら消されるかもしれない。
正直言って、今日は一人になるのが怖いから誰か一般人の友人の家に泊まろうと思っている。彼らも能力の存在を一般人から隠するために殺すのだから、まさか一般人の目の前で殺したりはしないだろう。

「一般人の友人って高科先輩か山野辺先輩だけじゃない？」
「おぉ、それは言い得て妙だな」
「変に難しい言葉遣いしてもその二人しか友達らしい友達がいない

のは周知の事実だよ」
「はい、お兄ちゃんのナイーヴハートを傷付けるのやめなさいねー」
「大丈夫、優しい私が癒してあげるから」

うん、この子はそれが優しい行為だと本気で思ってるのかな。自分が傷付けておいて自分で癒すってプラスマイナスゼロだよね。むしろ若干マイナスの方が大きい気がする。
って言ったそばからふざけてるし……俺も含めてダメダメだな。

「私はちゃんと考えてるよ？」
「おぉ？　意外すぎる」
「まず最初に荒縄、手錠、首輪にギャグボールを用意します」
「はい却下。それで詩端を監禁するとか言うんだろ？」

口封じをたくらむ処刑人（エクスキューター）から逃れるには自分達が能力を公表するつもりが無いことを示せばいい。今回のケースならば俺達の手で詩端を口封じすれば彼らにとっては問題ない、というのが紅羽の提案の意味だ。

「違うよ？　ソラ兄はなーんもわかってないよ」
「え？」
「だから、詩端さんなんてどうでもいいの」

詩端の口を閉じさせないならさっきの三つは何に使うんだ？　いや、さっきの三つで口封じするつもりだったならそれはそれで紅羽の再教育を頼まなければいけないけど。

「だからね？　ここをこうしてー……こうだっけな？　それでこうして、こう？　あれ、こうか」

口で説明しづらいと判断したのか紅羽は丁寧なジェスチャーを駆使して俺に考えを伝えようとしてくれている。ただ何となく伝わってくる断片的な内容が問題だ。
例えば荒縄を持ったと仮定した手を俺の身体のそこかしこで動かしてみたり。例えば俺の両手を後ろ手に回させて手錠的な何かを嵌める動作をしてみたり。極めつけに俺の首の周りにネクタイとは明らかに違う構造の物を巻きつける。

「……なぁ紅羽」
「うん？」
「どういうことだ？」
「私とソラ兄の二人で逃げて、執行人なんかに見つからないようにソラ兄を暗い部屋で飼うの」

えへへー、と蕩けた笑顔を俺に向ける紅羽。誰か助けて下さい。ところで紅羽の奴、ついでに目撃されてる蒼羽のことは置いていっていいのか……？

「姉さんなら平気じゃない？　姉さんだし」
「ん、んー……確かにあのぽわぽわした奴が能力者とは誰も思わないだろうな……魔法とか使えそうだけど」

確かに。そうだろ？　なんてやり取りをする。問題は何も解決していないけどなるようになる気がしてきた。というか執行人（エクスキューター）とかお伽噺で良いじゃん。

「じゃあ、姉さんのお見舞いにでも行こうか」
「まだ六限もあるぞ？」
「しーらない！　あ、ソラ兄あれやってよ！」

そう言って、俺が弁当と一緒に片付けようとしていたスプーンを取って俺に差し出す紅羽。
まぁ、俺とスプーンといえばあれしかないよな。
ヒント、俺の能力は金属を自在に変形させること。
そして正解は、

「ゆり〇らー！」

ただのスプーン曲げだ。
プロと違うところは端っこを指で摘んでるだけってことと、スプーンが蝶結びになること程度だ。超能力なんてそんな大したものじゃない。
調子に乗ってぐにゃぐにゃ曲げすぎたスプーンが折れたから適当にくっつけておいた。まぁ便利っちゃ便利かもな。包丁も砥がなくていいし。

「じゃー帰ろ！」

（後書き）

ヒロインはあと二人います。名前出てるのが一人と出てないのが一人。

そして書いてて気づいたのは私は割と年下好きらしい（

女先輩とか出てくる気配ない

ところで文章量って何文字くらいが読みやすいんでしょうかね？

参考までにこれで１２０００文字くらいでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9045r/

Gunp!!（お試し）

2011年9月14日19時09分発行